特 260
77

籠太鼓

昭和改訂版

内三

始

特260
77

籠太皷

（梗概）肥前の國松浦某に召仕はれし蘭の清次と言ふ者、他郷の者と口論の末殺害せし罪により牢舎につながれしが、大剛の者とて一夜牢を破りて逭走す、松浦何某牢番に命じて其妻を牢に投じ夫の行方を糺問せしめしに、彼女狂氣を裝ひ實を吐かず、某はその心根をあはれみ牢より出ださんとせしに、この牢の内こそ行方知れぬ夫の形見よとて出でず、牢の戸に懸けありし時を知らする太皷を見、夫婦の情を歌詞によそへて歌ひつゝ打ち鳴らし心を慰むる有様いと哀れなり、恰も其の年某が親の十三回忌に當りたればとて、清次の罪をも赦しけるに女は打ち喜びて歸り、ともに睦まじく暮しけるとぞ。

シテ　関清次
ワキ　松浦某
所　肥前國松浦
季　春

籠太鼓

わき詞

是ハ九州松浦の何某にて候扨も某が知行の内に関の清次と申者の候が他郷の者と口論し忽に敵をバ討て候然るを科人の事にて候程に彼者を籠舎させて候又妻の者にて候常に番此

事堅く申付ばやと存候
シテ 科人を籠にこめをき申上ハ女と云此沙汰
科ハ餘りに情なき御事にて候
ワキ いかに女
シテ 御まへに候
ワキ 汝が夫の清次ハ此暁籠
を破りて失せぬ夫婦の事なれバ志らぬ
事ハあるまじ真直に申候へ
シテ 本より
賤しき身にて候程に我身の恥を悲しむまでもの
三歡び候へ妻子にハ何とも志らせ候ハ
ワキ 中〳〵左様に申ハ去事なれども先〳〵其家を
さがさん程女を此籠に籠舎して其
有所をたださんと　今此女を引立つる
シカ〳〵 急ぎ籠舎に入べしと情なくもあ

らける衣人ハ情なしとも思へバ殺害
乃科をのがれえぬ報ひの程ぞ無慙な
涛し／＼して思ひ中にあまれバ色ハ外
にぞ見へつらん つゝめど袖にたまらぬ
白玉ハ人を見ぬめの涙の瀧
わき いかに女何迚狂気とハ成けるぞ
して 何故

ぞとハ愚なる人心の花なれバ風乃
狂ぜぬ事こと有べし況偕老同穴と契
し人に死別れて頼る方とても存せバ犯
に妾安からぬ難儀乃うち思ひの闇のせん
方なさに物に狂ふハ僻事か
わき 実こ
おつとの別きを歎き此思ひハ一方ならぬ

身の歎きに狂乱心は理なり去ながら
いづくに夫の在所知らせず好て尋ねて
汝を籠より出だすべし在所を知らば
申也　して　是は御詞とも覚えぬ物かなた
とひ在所を知りたりとても顕はし
つまを失ふべきならばこそ夫の在不[illegible]

現にも知らぬ物を　わき　優しき女乃いひ
ごとゝ思へば手づから籠乃戸をひらかれ
早是とぞとく出よ　して　御志は有難け
れど夫にはなれる此身なれば此籠を
うちをばいづまじや是こそ形見よなつ
かしや　同上　恋しや我夫乃身にかへり

よる籠乃内出ましや西の夜乃色ぞぬ
名残ぞ惜しき高楼に月落て花乃
間を拂ひ果ぬ鞍ぞ落きた灯のおりて
古ら洞に影恥かしき姿哉　わき　僞りと思
ふなとくとく出給へ　して　始より涙まし波
さバかく憂目をバ見せ給ハじ　去まてと

我夫ハいづくへ行給ふらん乱れ
さこそ嫋ふぞ　乱涙ハ柳の髪も西の
涙にむせぶばかり哉　して　而ふく是成鼓
ハ何の為ぞ　わき　夫も籠を出る君の時
を志る相思乃鼓にくるぞとよ　して　何の時
残しる数の鼓とや　わき　中々の事

して面白しくば呉國にと云例あればゞ鼓
を掛て時を告し事を公任乃哥にゃ
時告る乃ちうちまに法ぐみ聲きけば時
了雅をうつきを君ゃ君を送くて送くと君
がおんまでぞ鼓の聲もちるよそ
く　鳴鶯の青柴乃竹　湘浦君

浦や娥皇女英の　諫鼓苔むせて
津ぐみぞうつをなや形をわりしや
鼓れ聲も時るでくし月を西山にかつふ
けば粗乃声を追づくなれ鼓うたゝふかゝや
いつの鼓い佛りれ楚あさこ成楽あ琴の引
離きいりくまゆ家如く思び旅のやつる

なゝうたふよやなをゝやゝうたふよ
四の鼓ハ世界にし恋と云事も頃と
云事もなき習ひ我らが独り物ハ思ハじ
して九つ乃し根事よをぬさりやいのゝ恋
し我夫の傍よこちた里焼しやせめて
実身代りよ立てまうハ二世乃ちひを表

べられ此牢出侍事あるじ存門かしの
此籠やならなつかしの此牢な
わき　弓矢八幡を滞知見あるま夫婦共ふ
命を助くべしとうし出けへして　此上ハ法
修里たよるをあるじ識たきまれ生新
筑前乃宰府よ志侍人あまきバそあさ

へ古きてやゆらん　いしくをかくさぞ

中ゟり志らも今年ハ家親の十三年

ミ當りたまへバ科あ里とても助け母の

松浦乃川や西乃海　彼國ちらし

極樂の　弥陀誓願のちかひかや科

をたまく衛あたまみのあら有難乃法

慈悲や　扨て時日をうつさ須し

かくきしち人を尋つゝ　それぞれみ尋り

居ろく結ぶ契乃末久ミや松浦の川や二

世の縁家の難き沁の瀬し

昭和十年二月十五日印刷
昭和十年二月二十日發行

定價金五拾錢

東京市下谷區上根岸町八十二番地
著作者　寳生新

東京市京橋區銀座西六丁目三番地
發行兼印刷者　江島伊兵衛

發行所　下掛寳生流謡本刊行會

著作權所有

終